

英語と計画言語再考

—— 多言語主義への道をさぐる ——

三 沢 美智子

…対立から協調へと人類の歴史はおおきく転換した。あらゆる面で諸民族の交流が進展していく大勢の中にあって言語問題は今や人類の直面する緊急課題のひとつである。国際交流には、真の意味での「共通言語手段」が必要である。英語をはじめとする「大言語」は、それを母語としない人びとにとっては生得のハンディキャップがあり、不公平、不平等であることは、誰しも否定できない。(水野) (注1)

更につづけて水野氏は、人類の「言語問題」解決のかぎはエスペラントにあると述べている。あらゆる場面に英語が浸透し、その大小を問わず、他の諸言語を飲み込みそうな勢いを見せている現代において、はたして100年余の歴史を持つ計画言語であるエスペラントは、どのような存在意義を持つのであろうか。

計画言語エスペラント批判

エスペラントのような計画言語に関しては、その現代的意義、役割について懐疑的、批判的、否定的コメントは随所にみられる。Longman Dictionary of English Language and Culture (1992) によるEnglish speakers からの説明は

"Esperanto is an artificial Language intended for international use. Although it was inventd in 1887, it has not been popular or successful. Many people still do not know what Esperanto is and only a

small number of people in the world speak it.”

であり、更に ‘international language’ については、‘Some artificial languages have been invented for this purpose, though many people today consider English to be an international language, especially in the business world.’ と、英語がエスペラントのめざした国際語になったのではないかと、いう。また D. Christian は ‘Language Planning’ の中で エスペラントは 初期の目標の達成に失敗したとして、その原因を ‘The failure of Esperanto movement to achieve its goal appears to be a case of a purely linguistic solution that ignores the social aspects of the situations. In international dealings, power and prestige are important determinants of language choice’ ある言語の普及には言語自体の力だけにかかっているのではなく、背景にある社会的要素が重要であり、それを無視したことにあるとする。加藤和光は、創造者の「希望」に反してエスペラントは国際語にはならず、普及は限られたもので、現在 lingua francaとして認められているのは英語である。皮肉にも、英語の lingua franca 化が始まったのはエスペラントができた頃からだという。英語至上主義への反省から、世界の言語的、文化的多様性を受け入れて、複数の外国語教育を主張する石井洋二郎は、世界にひとつの共通語エスペラントなどという幻想は捨てるべきだと主張する。田中克彦のいうように、エスペラント運動のおかれている環境はたしかにきびしい。その主因はもちろん、いよいよ強まる英語支配であり、コミュニケーションの平等とか、諸言語の同権を求める理想主義の後退および現実主義優先の風潮であろう。

「英語支配」の現状認識のしかた

今日の「英語支配」という現実の存在を否定する人はいないであろう。ただその現状の受け入れ方はさまざまである。積極的な現状容認派、消極的妥協的あるいは現実主義的容認派、現状を疑問視または積極的に批判する立場をとる人々

である。以上の中ではもちろん現状容認の立場を取る人々が大多数であり、今日の英語ブームに拍車をかけている。国際的コミュニケーションの場で苦々しい、あるいは悔しい体験をした人、とくに、政、財界、またビジネス関係者に現状の積極的容認派が多いようである。すなわち英語は現在英米を含む英語国のみならず、東南アジア、中東ヨーロッパ等にも広がり、インターネットの普及はさらに英語支配を強化し、英語の世界支配は完成段階に入ったと認識する。寺沢芳雄の言によれば、国際機関で働いてみると英語は世界語であると実感する。ほとんどすべての国のトップは通訳なしで英語でコミュニケーションがはかれる。英語が分からないと平気で言えるのは日本のリーダーだけである。英語で話せないで日本のリーダーは自己主張ができず外国とのトップとの触れ合いもできず、したがって国民の代弁もできない。(注2) 悔しくても「世界語は英語」は事実であると受入れ、日本が世界から取り残されないためには国をあげて英語の話せるリーダー、ホワイトカラー、世界に通用するエリートを早急に育てる必要があると、英語教育の改革を提言する。また各国の言語の影響、またアジア各国の影響を受けた、いわばアジア変種の英語がアジア諸国間の共通語としての、また対欧米コミュニケーションの際の言語としての機能をはたしていることを肌で感じて、本名信行は、英語はアジアの言語である。日本人は今後国の内外で英米人よりはアジア諸国のひとびとと交流する機会が多くなるので、アジアにおける英語コミュニケーションの問題を本格的に考えるべきだという。(注3)

諸外国と政治的、経済的、文化的な協力関係を作り上げるためになんらかの世界共通語は必要であるが、共通語は英語である必要はない。しかし英語からきりかえるには、英語を使用することによる不利益にもまざる、理念では補えない莫大な労力と犠牲を払うことになる。計画言語がベストであるが夢物語なので、現在ほとんど「世界語」となりつつある英語を、英米文化の支配をうけないように気をつけながら利用する方策をとるほうが賢明と主張する斉藤兆史は、現実主義者の現状容認派といえる。(注4) 容認派の人々が考える英語は、

相互の変種間の理解が不可能にならないように最低限の共通性は必要であるが、学ぶべき英語は International English であり、Anglo-American English である必要はないとする。流暢ではなくても、中身を伝えたい気迫のある英語が必要なのだとする。寺沢氏は、言葉は便利な記号、コミュニケーションのための道具と考えるべきであり、言葉の背後には文化があるから、そう簡単には言葉の統一はむずかしく、文化を守るためにもそれぞれの言葉を大事にするべきなどという論は、お年寄りの希望的観測であると断ずる。このような英語支配の現状の容認派は、より効果的な英語教育を、小学校からの英語教育導入をと声を大にする。現代の英語支配に批判的な人々も、海外にでた時英語は必要であり、英語の学習の必要性は認めている。では上記の容認派に比して、まるで大海のなかの一滴にすぎないような少数派である英語支配の現状にたいする批判派はどのようなスタンスをとるのであろうか。それぞれ微妙な違いはあるものの、共通しているのは、現代の英語支配は英語民族、英語国家にとっては、非常に有利で、都合がよい状況であり、非英語国にとっては、不公平で不利なことだという認識である。そして英語が世界的国際語に近い地位にあるという事実を、英語至上主義を正当化するための理由にしてはならないという認識である。

いわゆる英語帝国主義論争のながれ

本誌第8号において、異言語接触における対等なコミュニケーションの立場から、国際語問題、英語と計画言語、および外国語教育の問題にふれた。コミュニケーションの平等からみて、一つの民俗語が世界的レベルのコミュニケーションに使用されることの不合理性をみとめながらも、現実主義が理想に勝る現代において、計画言語は消極的ながらも我々人類の言語問題について、ひとつのチェック機能を持ち、理想への問いかけを続けるべきだと論じた。それと前後して今日まで、急速なインターネットの普及もあいまって、英語がこれほどまでに広く世界に浸透している状況、いわゆる「英語支配」の問題が英語教育関係の分

野で、また広くマスコミで論じられてきた。いわゆる英語帝国主義論争である。限定された範囲ではあるが筆者の検討してきたその系譜を略記してみる。

- 1989 中村敬：英語はどんな原語か—その社会的特性—
- 1990 大石俊一：「英語」イデオロギーを問う
- 1990 津田幸男：英語支配の構造
- 1991 田中克彦：言語からみた民族と国家
- 1992 ググラス ラミス：イデオロギーとしての英会話
- 1992 田中克彦：国家語を越えて
- 1993 津田幸男：英語支配への異論—異文化コミュニケーションと言語問題
- 1993 中村敬：外国語教育とイデオロギー —反=英語教育論—
- 1994 週間金曜日 誌上討論 筑紫哲也、中村敬、津田幸男
- 1994 現代英語教育 特集—「英語帝国主義」をめぐる—
- 1996 時事英語研究 誌上ダイアログ 松本道弘 対 中村敬
- 1996 津田幸男：侵略する英語 反撃する日本語
- 1996 国際語 에스ぺラントに関するプラハ宣言
- 1997 三浦信孝編：多言語主義とは何か

その他 雑誌、有力紙などへの寄稿文、投書、対談、討論など多い。

また海外でも英語一極集中に関する申し立てが出始めているようである。デンマークの Robert Phillipson の Linguistic Imperialism (1992) が発端となり、1996年に香港理工大学で第1回言語権国際会議が開かれたそうである。津田氏によれば、言語権会議は「英語支配」だったとのことである。

現状認識のスタンスが同じでないように、英語支配の弊害を和らげる、あるいはふせぐための提言もことなるが、このような論議が行われることに意義があるという津田氏のいうとおりかもしれない。

英語教育論争の歴史の中で、はじめて英語教育関係の分野から、英語支配批判がでたということで注目をあびた。すなわち中村敬、大石俊一、津田幸男の

三氏である。中村は英語の侵略によって母語を失った民族に思いをよせ、英語教育にあたっては、英語の有用性と英語の暗部、侵略性という両面を示すとともに、外国語科目を複数化し、その中に人工語の追加も考え、また教科書の題材も英米一辺倒をさけることを提言する。この提言は今年度改定の中学校の英語教科書をみるかぎり多少は、反映されているようである。大石は母語以外の特定の言語が優先的に教育されてはならないとし、英語熱にうかされた日本における「英語状況」は世界の中の日本人、日本文化のありかたの根本を露呈する大問題であるという。(注5) さらに、外国語の習得は自由への飛躍となりうるが、精神を奴隷化することもありうる指摘する。(注6) また英語=外国語、英米人=外国人、西欧化=国際化という錯覚におちいらないよう注意する。「英語支配の構造」によって、コミュニケーションの平等の立場から、英語帝国主義への異議申立てを発表していらい、国の内外において、精神的に活動している津田は、もっとも明快な議論を展開し、「英語支配への異論」。「侵略する英語 反撃する日本語」で、つぎつぎと「異議申し立て」をおこなっている。日本人は英語至上主義、欧米至上主義に支配され、欧米への憧憬、崇拜、迎合の態度がめだつ。英会話産業、英語教育、マスメディアは英語支配の共犯関係にあると断ずる。氏の提言は英語圏との「英語協定」、「国際コミュニケーション条約」の締結である。コミュニケーションにおける対等主義を追求し言語対等主義の立場から、外国人にたいして日本では日本語で、外国に行ったときは現地語で、をめざす。そのために様々な外国語の学習は当然おこなうことになる。津田は、英語支配への異議申し立ては始まったばかりであるが英語がもたらす利益、つまり、広い通用性、経済的利益、文化的付加価値等、に目をうばわれて、英語支配がもたらす深刻な問題に無関心な人々が多い現在異議申立てをすること自体に意味があると主張するが、堀部秀雄は、英語帝国主義批判は、真の国際主義を志向するものであり、英語教育にたずさわる者にとって、無視することができないもので、いわば「喉につき刺さった小骨」であり、21世紀に向かって、外国語教育の再考をせまる問題をはらんでいると述べている。

(注7)

一言語主義社会から多言語主義社会へ

理想的な異言語間コミュニケーションは、言語相対主義にもとづくもの、すなわちすべての言語は平等であり言語差別をしないことである。有利な言語や不利な言語がないことである。しかしながら、いま世界では圧倒的に広い地域で英語が通用し *lingua franca* の機能をはたしており、その傾向はつよまっている。異言語接触の機会はますます多く、共通語は求められている。理想的には、共通語はどの母語からも同一距離にあるものがよいのであるがそのような言語をつくることは難しい。当面は英語、つまり様々な変種を容認する英語が使われることになるであろう。しかしそのことが英語至上主義を認めることだと決めてはいけない。言語と文化は切り離せない。英語による世界の一言語的支配は、英語圏文化の一元的支配となる。一国内においても、世界的にも一言語支配がすすむにつれて、多言語主義の運動がおこる。アメリカにおける *English only* か *English plus* かの議論、15カ国に拡大した欧州連合 (EU) のふえつづける公用語問題、フランスの国民議会で通過した「フランス語使用法」なども、その視点からみることができるとはではないか。

「世界には無数の言語があり、それに応じた無数の思考形態がある。

異なった複数の民族、言語、文化同士の共存の可能性が模索されている現在、それぞれの客観的な「差異」を外国語を通して認識しなければならぬのではないか。」(注8)

と、主張する石井氏も、多言語主義にたつ論を展開している。東大において、「第一外国語」「第二外国語」から「既習外国語」「初修外国語」と呼び方を変えて、英語至上主義への反省を促すことになったと体験を記し、さらに、英語の圧倒的な通用度の高さと重要性は認めても「外国語イコール英語」を前提として受け入れることの危険性を指摘するとともに、世界がエスペラントという共通言語で統一されるという夢は、すぐに捨てるべきだと断ずる。一言語主義

の否定である。

異言語間コミュニケーションにおける平等とエスペラント

平等なコミュニケーションは、各々の母語が尊重されることである。おこりうる異言語間コミュニケーションの場、即ち異言語接触の場におけるコミュニケーションのありかたを検討し、エスペラントのもつ可能性についても考える。

(1) お互いに自分の母語で話をして意志の疎通をはかれる場合。

これは理想的な場合である。このためには、相互に相手の言語を学んでいることが前提である。本来外国語の学習はあたらしい世界がひらけ、相手を知ることができる楽しい夢のあるものであるが、習得するためには、たいへんな努力、時間、お金がかかる。会社の駐在員、国際機関の要職者としての期間および留学年数を含めて在米期間22年の寺沢氏は、100%英語が分かったことはなかったと記している。それほど外国語を習得することはむずかしいのである。さて我々が接触する言語は英語だけとは限らない。しかし多くの外国語の習得は大変である。ここにエスペラントの役立つ場がある。事実私事ながら、今夏そのような体験をした。青森までのドライブ旅行中、エスペランチストの援助を受けつつ日本を旅行していたオランダの幼稚園の教師に紹介され、2・3日同行した。TOEFLでトップの成績のオランダで高等教育をうけていれば英語で話が通じるとの期待ははずれた。運用能力ゼロに近いエスペラントが、唯一の手段であった。帰国後彼女から届いた写真同封の手紙に、半年ほどの通信教育で学習した程度のエスペラントで応答した。

(2) 当事者のいずれかの言語でコミュニケーションが行われる場合。

あきらかにこの場合は平等ではない。上記のように外国語の習得は困難である。友好関係にある場合は、それでも自分が相手の言語を使える喜びが、不平等感に勝るかもしれないし、その言葉の運用能力をほめられて、誇らしくおもうかもしれない。しかしながら、競合関係、利害関係にあり、相手を議論によって説得しなければならない場合は、母語話者は絶対に有利な立場に立つ。

(3) 当事者からそれぞれ等距離にある第三の言語によるコミュニケーションの場合。

現代では、その共通語には英語が使われる場合が多いかもしれないが、世界に存在する言語の多さを考えると、その可能性は様々である。(1)でも触れたが、英語のほかに最小限エスペラントがその効力を発揮できるのではないか。

さらに福地氏の異言語接触の場の分類にもとづきコミュニケーションのありかたを検討する。(注9)

(1) 国連、欧州連合などの国際機関におけるコミュニケーションのありかた。

現状では、国連では、法的に公用語、作業語として六言語がきめられ、それ以外の母語話者は、自前で通訳や翻訳をつける。不平等は明白である。理想的にはエスペラントのような非民族語が採用されることであろうが個人レベルのコミュニケーションの場合と異なり、前記のような言語の普及の要因からみて夢に近い。しかし母語主義は守るべきであり、妥協策として通訳と翻訳の費用はその機関がもつ。欧州連合では通貨の統一をはかるが、言語的には多言主義であり、公用語は11ヶ国語である。英語、フランス語など5つに絞りこむ案もあるが、国民感情や文化の多様性尊重の建て前が絡みむずかしいとのことである。英語支配にたいする一つの解決法かもしれない。

(2) 学会、ビジネスなどの多国間交渉の場

ここでは、母語で発言、発表、交渉ができるか否かは重要である。TVでのダイアログのなかで、ある数学者が専門分野の学会で競合するとき、自分が学生時代に英語、ドイツ語、フランス語の学習に心血を注いでいた間に英語話者は専門の研究を続けていたことにたいする悔しさを強く感じたと言っていたことは印象的であった。(1)と同様にエスペラントが理想であるが、せめて母語主義をとるべきである。

(3) 海外駐在員、留学生などの異言語地域の長期滞在者とその地域の人々とのコミュニケーションの場

この場合は言語の相対主義により、現地語主義を原則とするべき。したがっ

て、日本にいる英語話者にたいして日本人が英語を話せないことや、上手に話せないことを恥じる意識は捨てるべきであるし、日本人は英語を話すのが当然という英語話者の意識の変更が必要である。日本民族学博物館の前館長であった文化人類学者の梅棹忠夫は、訪問者には日本語で応対をする主義で、館内の展示説明も日本語であった。必要な人は自分で通訳を連れてくるべきであるという主張であった。この意識があれば、日本語のわからない他言語話者にその言語を話してあげるという気持ちで平常心で接することができるはずである。英語国に滞在する場合はその逆であることは当然である。

(4) 旅行者その他の異言語地域の短期滞在者とその地域の人々とのコミュニケーションの場

現地語主義をとるのが望ましいが、このばあいは現地語を多少は習得してあることは必要である。ここでは 에스ペラントの役割を期待したい。

(5) 文通、インターネットなどの書き言葉のみの異言語間コミュニケーションの場

テクノロジーの急速な進歩がのぞまれる現在、この場にこそ英語支配の状況に風穴をあける多言語主義社会への道があるようにおもわれる。インターネットの普及を、英語の世界語への道を加速しているというのが多くの見方ではあるが、逆の見方も可能ではないか。

インターネットは多言語主義への道を開くか

20世紀にはテクノロジーの驚異的な発展が見られ、世紀末にちかづく現在、その発展の度合いが加速されている。ことに地球的規模でのコミュニケーションの手段としてのインターネットはますます普及している。インターネット上での情報発信はおよそ80%がアメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどを含む英語話者の国々であるとのことである。webのページの約86%が英語による情報で、第2位がドイツ語によるものだということである。(Mark Fettes,1997) 多くの偶然が重なって、世界の広範囲にその

勢力をのぼしてきた英語はインターネットの出現、その普及によってその国際語的性格をつよめてきているかにみえる。ある言語が国際的に広がるための条件は、歴史的、文化的な要素、政治的、経済的な条件に加えて、人々がその必要性を痛感して習得しようと努力する言語であることである。たしかに英語はその条件を満たしている。インターネットの普及を、英語支配の現状の容認派であれ、批判派であれ、英語支配の強化の主因であると考え人が多い。たしかにインターネットをやるようになった人々は、ますます英語の必要性を感じているらしい。筆者も英語を通じて得られる情報の豊かさに圧倒されることもしばしばで、まがりなりにも英語が使える便利さを感じるのは事実である。しかし英語を利用して他の言語、たとえばロシア語や、エスペラント語による資料もかなり入手できる。

...About 86% of all web pages are in English and, happily, I speak English as my mother tongue. Why then do I waste my time writing most of my web pages in Esperanto? There are three reasons:

- (1)English is the main web language, but the cause is not any natural goodness of English, but history ...But history is fickle:in 30 - 60 years..?
- (2)The golden rule: Do unto others as you would have them do unto you. I want others to write their pages in a language that is easy to me to understand.
- (3)... I hope someday to have a translation program...And in my opinion, translating from Esperanto to English(or any other major language) would be much easier than the reverse...

(M. Fettes)

以上はアメリカ生まれ、ニュージーランド、イギリスに長期存在し、現在カナダの永住市民権を持ち、大学で教えている言語学者のことばである。氏は英語、

エスペラント語をつかい、フランス語、オランダ語その他のヨーロッパ言語にあかるとのことである。もしW. W. Web がそのなまへの示すように全世界へむけてのものならば全世界の人々のための言語で書かれるべきだと主張する。そして近い将来翻訳プログラムができると考えており、その場合エスペラントから英語その他の主要言語への翻訳のほうがその逆より容易だと思うのでエスペラント語と英語で情報発信しているとのことである。

コンピューターのテクニシャンの立場から村山純氏は、コンピューター言語の問題について、情報の開示は英語でなければいけないと言う考えはあまりにも世界を意識しすぎた誤解であるという。様々な技術的な困難をのりこえて日本語のままの情報がインターネットに流れ、そのままコンピューターに表示されるようになりつつある。日本語の情報がインターネット上に流れるようになって日本語の情報に対する反応が世界中から、片言の日本語でよせられるようになってきたそうである。その広がりやコンピューターネットワークと言葉の関係を考えさせたという。もしネットワークがなかったら、マルチバイトを使うアジアの言語圏と、シングルバイトの欧米諸言語圏のあいだの大きな壁が徐々に崩されてはこなかったであろうという。氏の説明によれば、ネットワークにさまざまな言語による知識、情報が蓄積されていて、それを交換したい共有したいという気持ちがテクノロジーを変えることができたのである。インターネット上で、これまで以上に英語が主流になるであろうという見方があるが、技術的にはその逆の可能性もあるようである。日本語しかできない人は日本語を使えばよく、その情報が大きな意味を持っていれば、テクノロジーの助けで広がっていく。このようにしてインターネットは多様な文化、言語を尊重しつつ国際的なコミュニケーションに貢献できる可能性があるという主張も根拠のないことではないようである。

朝日新聞（1997,4,4）の記事によると、ATR音声翻訳通信研究所（京都）は、アメリカ、ドイツ、韓国の研究所、大学と共同で「多言語音声翻訳通信システム」の開発にのりだすとのことである。1999を目標に会話を相手国の言葉に自

動翻訳し、同時通訳者がいない国際TV会議の実現を目指すのだそうである。

手元にはアメリカのドクター（筆者の留学中のスポンサーでもあった友人の遺児である）からの手紙がある。日本では、かなりおこなわれているが、アメリカではあまりなされていない研究で、英語に訳されていないものがあると聞いて、英語での情報を求めているものである。

“... While in CA, I was told of research that had been done in Japan for years on Co-Enzyme Q10 & its benefits for heart disease and arteriosclerosis or narrowing &/or obstruction of coronary arteries.

It is my understanding that mega-doses of Q10 can clean out these arteries, and that even though quite a bit of research has been done in Japan—very little has been done in the U.S.A —and the research from Japan has not been translated into English. I am asking if you could find out if I could get some of the information in English... ”

この事実は、両面から解釈できる。世界の共通語の地位にちかづいているといわれる英語で発表されない論文は読まれない、との見解の証ともいえるが、非英語話者は、自分の母語で発表しても、その情報が欲しければ、手段を見つけて手に入れる、との説のうらづけともいえる。さらに、前述のように、遠くない将来、発展の一途をたどるテクノロジーが解決してくれるかもしれない。

計画言語エスペラントの現代的意義

1887年、多言語間の不平等を解決するために、言わば歴史的必然としてヨーロッパで生まれたといわれるエスペラントである。21世紀を目前にして、英語支配がますます強化されつつある現在、その文化の一元的支配に危惧を表明し、意義の申し立てがではじめている。現代は英語プラスワンまたはモアによる多言語主義が、複数の民族、言語、文化の共存をはかるためにのぞましいのでは

ないかと考えられる。言語をとりまく情勢はこのように変化している、本来の理想、すなわち母語の次の世界の補助言語になることとは異なるかもしれないが、英語帝国主義論争の中で、英語の一極化を改革するためにも多言語主義の道への橋わたし的言語として存在意義があるのではないだろうか。

WORKS CONSULTED

- Baron, Dennis: The English-only Question Yale Univ Press, 1991
- Christian, Donna: "Language Planning, the View from linguistics."
"Linguistics: the Cambridge Survey, IV. CUP, 1988. pp. 193-208.
- Crystal, David: Cambridge Encyclopedia of Language. Cambridge. CUP,
c1987. pp. 357-359.
- Fettes, Mark: Esperanto and Language Awareness. Univ. of Toronto,
Canada, 1997.
- 福地俊夫 "異言語間コミュニケーションにおける言語差別とエスペラントの
可能性" La Revuo Orienta 1997,8 pp.2-5。
- Francois Lo Jacomo 水野義明訳 言語の発展 大村書店 1992
- 堀部秀雄 "英語帝国主義をどう受けとめるか -ある歴史的パースペクティ
ブから- 現代英語教育 1997,8. pp.26-29.
- 本名信行 "アジア英語と日本人" 現代英語教育 1997,8 pp.25-27.
- 本名信行 "アメリカの多言語問題 -イングリッシュオンリーとイングリッ
シュプラスの運動から-" 多言語主義とは何か 1997 pp.
48-63.
- 石井洋二郎 "広がり行く外国語の宇宙" 言語 1995,7
- 加藤和光 文化の流れからみる英語 三修社 1996
- 川田順造 "ことばの多重化=活性化 -アフリカの体験から-"
多言語主義とは何か pp.18-33
- Manifesto de Prago de la Movada por la Internacia Lingvo Esperanto
La Revuo Orienta 1997,1 (Supplement)
(国際語エスペラント運動に関するプラハ宣言)
- 松本道弘 英語帝国主義をめぐる 時事英語研究 1996,10 1996,12
1997,2.

三沢美智子 “英語と計画言語” 信州豊南女子短期大学紀要 no. 8

三浦信孝／加藤周一 “日本の近代文化と多言語主義”

多言語主義とは何か pp. 293-334.

村井 純 インターネット 岩波 1996

森 住衛 “英語帝国主義をめぐって -この論争をどううけとめるか-”
現代英語教育 1994. 8. 9。

苗島和子 “エスペラントで何ができるか” 言語 1983.12

中村 敬 “英語帝国主義の系譜” 現代英語教育 1995. 3

中村 敬 “英語帝国主義をめぐって” 時事英語研究 1996.11 1997. 1. 3。

中村 敬 “病理現象としての ‘英語問題’ の本質 ‘英語病を告発する三冊’
週間金曜日 1994. 2.18

中村 敬 “再び英語帝国主義について” 週間金曜日 1994. 4.29
1994. 5.13

中村 敬 “私が反英語帝国主義論者になるまで” 現代英語教育
1997. 8 pp. 20-24

大石俊一 「英語イデオロギー」を問う-西欧精神との格闘 開文社 1990

大石俊一 “言語の ‘有用性、経済性’ と英語帝国主義”
現代英語教育 1995. 3 pp.24-27

大津田紀雄 “英語帝国主義はメタ言語によって粉碎できる”
現代英語教育 1995. 3

Putz, Martin: Language Contact and Language Conflict

John Benjamin, 1994

齊藤兆史 “英語帝国主義は怖い／怖くない” 現代英語教育 1995. 8

Schubert, Klaus: Interlinguistics, Aspects of the Science of Planned
Languages (Trends in Linguistics, Studies and Monographs 42)

Mouton de Gruyter, 1989

Socilingvistikaj Aspektoj de la Internacia Lingvo-kun aparta konsidero

pri la lingva diverseco en la mondo

(多言語多様性の中の国際語を考える) 講演録 1987

- Song, Zino: An Introduction to Linguistics Nan' undo, 1989
- 田中克彦 “エスペラントを包囲する言語イデオロギー” 言語 1983,10
- 田中克彦 国家語を越えて 筑摩書房 1989
- 田中克彦 “ブラハ宣言をどう読むか” La Revuo Orienta 1997, 8
- 寺沢芳男 英語オンチが国を亡ぼす -English Speakers Rise and Shine-
東洋経済新聞社 1997
- 筑紫哲也 “英語帝国主義に口を挟む” 週間金曜日 1994, 3,11
- 筑紫哲也 “再び英語帝国主義に口を挟む” 週間金曜日 6. 3
- 津田幸男 英語支配の構造 -日本人と異文化コミュニケーション-
第三書房 1991
- 津田幸男 英語支配への異論 第三書房 1993
- 津田幸男 侵略する英語 反撃する日本語 -美しい文化をどう守るか-
PHP研究所 1996
- 津田幸男 “英語帝国主義への共犯関係 -私たちが生み出す英語支配-”
現代英語教育 1995. 3
- 津田幸男 “英語支配の研究-海外と日本” 現代英語教育 1996,10
- 角田太作 “少数民族の言語の現状” 言語 1997, 9
- 梅棹忠夫 日本語と日本文明 くもん出版 1988
- 白井裕之 “多言語性の克服か多言語性の擁護か -エスペラントの存在意義
の再定義にむけて-” La Revuo Orienta 1997, 8

(注)

- 注1 フランソワ ジャコモ著、水野義明訳：言語の発展 p.1
- 注2 寺沢芳雄：英語オンチが国を亡ぼす pp.58-62.
- 注3 本名信行：“アジア英語と日本”
現代英語教育 1997, 8:pp.25-27
- 注4 斉藤兆史：“英語帝国主義は怖い／怖くない”
現代英語教育 1995,8
- 注5 大石俊一：“英語イデオロギー”を問う p.10
- 注6 —————：————— p.37
- 注7 堀部秀雄：“英語帝国主義批判をどううけとめるか”
現代英語教育 1995,12
- 注8 石井洋二郎：“広がり行く外国語の宇宙” 言語 1955,7 p28
- 注9 福地俊夫：“異言語間コミュニケーションにおける言語差別とエス
ペラントの可能性” Revuo Orienta 1997,8 pp.2-5